

英語教育における リズムとイントネーションの習得

鹿内 芳 貴

0. 序論

日本では戦後より英語教育が公に導入され、現在ではアルファベットを目にしない日はないほど英語が浸透している。しかしそれほど身近な言語でありながら、それに対する日本人の苦手意識は非常に顕著である。街角には英会話学校が看板を連ね、各種メディアでは英会話入門教材が多数見られる。公教育の成果は読み書きの分野で成功を収めているが、こと会話に関しては残念ながら効果的な教育方法が確立していないといえるのではないか。筆者は音声学的な見地から、日本人が英語の音声を苦手とする最大の原因をそのリズム性の違いと考えている。英語のリズムをしっかりと身につけることができれば、言語学習の最初のステップを乗り越えることができるのではないだろうか。しかし母語音声習得時の条件とは違い、外国語の音声習得の際にはその母語の強烈な干渉を受けるため、母語に応じた音声指導を受けなければ習得は困難である。そのため、日本語と英語を比較対照した上で、その違いについて言及する必要がある。

これまでの音声関係の指導書の対象はある程度年齢が高く、学習が進んだ人向けに作られており、肝心の英語初心者に向けて作られたものが殆ど見られなかった。教育的な見地からすると、日本語の体系が身に付いた人間の大半が第2言語として初めて英語を学ぶのは中学校からであるため、中学生程度を対象としたやさしい音声の指導書の存在は非常に有意義であ

る。そこで本稿は日本語の体系が身についた中学生を対象とし、リズム・イントネーション習得に有効な指導書を作成することを目標とした。

1. 先行研究

1.1 英米人の作成指導書を使用していた時代

日本の英語教育での音声指導において、日本語と英語の対照音声学 (contrastive phonetics) を考慮して編纂されたテキストは、近年ようやく研究が進んできた分野である。そのためかつては英米人が英語以外を母語とする人たちに向けて作成したテキストを使用していたものと思われる。参考として挙げられるのは「英語教育シリーズ」より『英語の発音』(ミシガン大学英語研究所編, 黒田巍訳注, 1958) である。この特徴として、リズムとイントネーションが発音記号上に記載されている音調変化を表す曲線表示方法を使用して、同時に表現されていることが挙げられる。黒田の注では日本語と英語のリズムの違いに関して、「日本語では音節を平坦に並べる傾向が強い。また、文の途中で切ることも多い。…要するに日本語のリズムは断定的である。…日本人は英語の文の強い部分と弱い部分とをはっきり区別して発音する習慣を身につけなければならない。とくに単語の強形と弱形の使い方を正しくしなければならない。」(黒田 1958: 114) とし、音声拍リズムと強勢拍リズムの違いを指摘している。

1.2 日英対照音声学を参考にした指導書

時代が下り日本語と英語の対照音声学の研究が進んでくると、日本人が作成した日本人向けの指導書が現れるようになった。一例として竹林 (1982) が挙げられる。竹林 (1982) は単語のもつアクセントを第 1 アクセント, 第 2 アクセント, 弱アクセントの 3 段階に区別し、またこの概念は

語のレベルのみならず複合語アクセント、句アクセント、文アクセントの各レベルでも使用している。リズムに関する記述はアクセントの章の中に含まれていて、英語リズムの等時性についての言及が見られる。

イントネーションに関する記述では、イントネーションが反映する話者の気持ちや、情報を伝えようとする働き、音調によって完結・未完結の意図が表されることを認めている。また、音調は下降調、上昇調、下降上昇調の3種類を設定している。上昇下降調の存在を認めてはいるが、ここでの扱いは省略している。

竹林(1991)はさらにやさしい指導書を発表した。その際にいくつかの変更がなされている。まずアクセントの項目に日本語のアクセントのかたちが導入され、英語との強勢現象の違いがより明快に説明されている。また、リズムに関しての扱いが重要視され、新たにリズムという名称で項目が追加されている。新たにアクセントの移動の現象が取り上げられている。イントネーションに関しては、音調の扱いが変化している。基本的な音調を下降調、上昇調、平板調の3つとし、特殊なイントネーションとして下降上昇調を挙げている。また、特殊なイントネーションの中にトニシティの概念を紹介している。

1.3 リズムとイントネーションに関する指導書

リズムとイントネーションを専門に扱った指導書として東後(1978)が挙げられる。彼は早くから日本語と英語における大きな違いがリズムとイントネーションにあると指摘し、「要は通じればいい」とする日本人の英語に対する開き直り感を批判している。「通じる英語」の根本はリズムとイントネーションにあり、それぞれの基本パターンを学ぶことによって練習への足がかりとなるとしている。

リズムに関しては、日本語の音声拍リズムと英語の強勢拍リズムの明らかな違いを指摘し、大中小3種類の四角(□□□)を利用してリズムの強弱を表現している。東後(1978)は実際のリズムは本来もっと度合いの差

が大きいのが、便宜上大小の 2 種類に加えてその中間の強さを使用している。

東後 (1978) は文法と密接に関わりあいながら《名詞 + 名詞》の読み方・《名詞 + 形容詞》の読み方など、発話におけるリズムの基本パターンとして 25 通りを挙げている。

イントネーションの役割に関して、心理的感情的な意味を伝えるもの、文の文法形態を変えるもの、ことばにあらわれない意味をほのめかすものの 3 つからなるとしている。更に音調とイントネーションの形態を、独自の方法でそれぞれ 7 種類に分類している。そしてイントネーションの形態の組み合わせをイントネーションの基本パターンとして《一般疑問文》の読み方、《疑問詞で始まる疑問文》の読み方などとし、21 通りを挙げている。

1.4 主要参考文献

本稿では主要な参考文献として深澤 (2000) を挙げ、後述の作成指導書における理論と構成をこれに沿うものとする。これまでの音声指導書は大半が母音と子音の指導に重点が置かれ、リズムとイントネーションに関する指導はほとんど触れられることがなかった。深澤 (2000) はリズム・イントネーション・音の連続に関する扱いを中心とし、より総合的に英語音声の体系を指導している。さらに、英語の発音を身につけるまでに乗り越えなければならない母語の壁の存在を指摘し、その上で日本語と英語の体系の違いに言及している。深澤 (2000) で特に注目すべきはイントネーションの理論に関してである。イントネーションの機能を話者の心的態度を表わす機能、発話のある部分を目立たせる機能、文法的機能の 3 つの観点から捉え、イントネーションが意味に影響を及ぼす働きをもつとしている。

さらに、もう 1 つの主要参考文献として深澤 (1992) を挙げる。深澤 (1992) は教育音声学という言葉の誕生とその意味を説き、日本における英語教育の問題点に関して次のように述べている。「日本における英語教育の最大の問題点がある、その音声教育にあると指摘されてから既に久しい。この

点において、日本の英語音声教育は確かに、誇るべき程のものを持ち合わせてはいない、というのは事実といってよいであろう。体系無き音声教育と、そこからもたらされた乏しい教育効果に関しては、何人もこれを否定し得ないといえるであろう。」(深澤 1992: 46) その原因として実践的な教育を一段低く考える日本の風潮を挙げ、理論と実践の両側面から捉えなくてはいけない音声学が軽視されてきたとしている。

深澤(1992)はこのような日本の教育界の傾向を踏まえ、日本語の体系から英語の体系へと、母語の壁を乗り越えるために必要なものとして学習者のニーズにこたえるテキストを作成することが重要であるとしている。音声教育のテキストに求められるものとして「学問としての音声学にその基礎を置き、二か国語の対照分析その他の科学的な研究方法によって学習者の持つ潜在的困難点を顕在化させ、その克服のための具体的方法を提示するものでなくてはならない」(深澤 1992: 58) という点を挙げている。これは本稿における指導書作成の指針となる理論である。

2. 中学校教科書の検討

2.1 使用する教科書

検討する教科書はすべて文部省検定済教科書で、2001年度に発行されたものである。以下に全7種類をアルファベット順で挙げる。

- A. Columbus (光村図書)
- B. Everyday English (中教出版)
- C. New Crown (三省堂)
- D. New Horizon (東京書籍)
- E. One World (教育出版)
- F. Sunshine (開隆堂)
- G. Total (学校図書)

2.2 リズムに関する指導

はじめにリズム指導に関する表現方法を見ていく。英語における強弱のリズム性を示すために ● と ・ の大小 2 種類の黒丸を利用することがある。この方法を採用しているのは New Crown, New Horizon, One World, Sunshine, の 4 種であるが、それぞれ表示方法が異なる。New Crown と Sunshine の 1 年は単語または発話の前にこれらを “ ● ● ● look at me.” のように表示している。他の教科書は音節の真上または真下に黒丸を置き、Sunshine も 3 年で再度扱う時には真上に置いている。その他に Columbus の採用している方法は □ □ の大小 2 種類の四角による表示で、これは東後 (1978) らの方法と同じである。黒丸と全く同じ意味を持っているが黒丸に比べて大小の違いがわかりづらく、視覚に訴える力は弱いと感じられた。中学生にとっては視覚的にわかりやすい黒丸を使用したほうが有効であると思われる。Total の採用している方法はやや異なり、楕円 ● を強音節の上へ表示している。強勢のある位置のみを示しているため、弱音節の存在がやや印象に薄く感じられる表示方法である。英語のリズムは強弱 2 種類から成り立っているため、弱のリズムも指導に含めたほうが効果的であろう。最後に Everyday English であるが、こちらでは黒丸や四角は採用せず、会話や発話のダイヤログで強勢の置かれる音節の母音の上にアクセント符号を記載している。通常アクセント符号は単語の発音記号の強勢位置を示すために使用されているものであるため、同じように発話単位の強勢位置の表示にもあまり違和感なく使用できるであろう。しかし Total と同じように、弱強勢を表示する術を持たないため、弱強勢に関する意識が薄くなってしまう可能性がある。

リズムの表現に関しては全ての教科書で扱っているが、日本語と英語のリズム性の違いを比較しているのは New Horizon のみであった。「タタタタ〜」という表現を使用しており、日本語は音節拍リズムであるため 1 音ごとに均等に「タタタタ〜」とルビが振られている。英語は強勢拍リズムであるために強勢のある単語には「ター」と太字で伸ばし、強勢のない単

語には「タ」としている。“Nice to meet you”の場合には「タータタータ」のように記述しているのである。中学生のみならず、日本人にとって非常に明快に日本語と英語のリズム性の違いを示していると言えるのではないか。

複合語における強勢位置の違いを取り上げているのは Columbus, New Horizon, Sunshine である。2つ単語が並んだ場合のどちらに強勢が置かれるのかを指摘している。New Horizon では数字が含まれる表現に関して、強勢の位置を示している。また Columbus と New Horizon はカタカナ英語と英単語の強勢位置が異なるということも指摘しており、これは英語が氾濫している現代日本において非常に重要な意義をもっていると考えられる。日本語化してしまったカタカナ英語は自分では正しく話しているつもりでも、その強勢位置が異なることによって英語母語話者には理解できない発音になる大きな要因となるからだ。

リズムの強弱を指導するために Columbus では接続詞 “and” が発話で弱くなることを、さらに New Horizon では前置詞 “to” や冠詞 “a” “the” が弱くなることを指摘している。これらは母音の弱化にもつながる現象であるため、それを一言付け加えると効果的ではないだろうか。また、New Horizon では There is [are] ~ の発話で、その部分が弱くなることを指摘している。

このようにリズムに関する指導は、一方で指摘されていなかったり、他方で多く説明されていたりと教科書ごとにより違いがみられる。その中で New Horizon は非常に多岐にわたってリズムを説明していると言える。全体的にみた場合、強勢拍リズムと音節拍リズムの差は英語と日本語の最も大きな違いであり音声教育の中で重要な要素を占めると思われる項目でありながら、まだまだ扱いが小さいと感じられた。今後の学習指導要領の改定に伴い、重要視されるべき項目であろう。

2.3 イントネーションに関する指導

イントネーションは強勢・リズムと非常に綿密な関係を持っているため、リズムの扱いが多い教科書は必然的にイントネーションの扱いも多い傾向が見られた。イントネーションの視覚的学習のために使用されているのは、ピッチ変化を直線などで直接発話文の上に書き込む方法である。Columbus, One World, Sunshine の3種で使用されており、Sunshine が強勢の置かれる音節の母音の上に黒丸でマークしている以外、形式はほぼ同じである。これは Prator and Robinett (1985) に代表されるイントネーションの曲線表示方式を利用したものであり、視覚的にピッチの変動がわかるため、学習効果は大きい。しかし竹林 (1996) はこの方式を「ピッチの変動が過度に図式化されて単純になっているので理論的な説明に向かず、…印刷上多少不便が伴う」(竹林 1996: 431) とし、問題点を指摘している。英語のイントネーションは本来もっと複雑に変動しており、具体的に説明するとなると様々な高さのピッチの表現が必要となる。直線で表現すると機械的なピッチ変化になり、具体と抽象のちょうど中間的な表示方法であるといえるだろう。

New Crown, New Horizon, また Sunshine の一部でも使用されているのが、音調変化を矢印で表す方式である。New Crown では発話文のはじめに、他の2種では終わりに下降調、上昇調を区別して矢印で記述している。ほとんどは肯定文、疑問文、疑問詞を使った文を区別して指導している。使われているのは下降調、上昇調の2つだけである。また、Total では下降調、上昇調を聞き取りで記述する方法を採用して音調指導としている。

以上の2種類を検討した結果、後述の作成指導書では曲線表示方法は用いず、抽象的な表現として音調変化の起こる音節の真下に音調を表す記号を記載することとする。具体的すぎるとは現場での指導に向かず、曲線表示方法では過度に機械的な音調変化になってしまう恐れがあるからである。

次にイントネーションの機能に関する指導を見ていく。イントネーションの働きは大きく音調変化 (トーンズ, tones), 音調群の境界を設定 (ト

ナリテイ, tonality), 情報の焦点を示唆 (トニシティ, tonicity) の 3 つからなるとしたのは Halliday (1967) で, そのあとを受けた Tench (1996) が彼の理論をより詳細に研究した。今のところイントネーションの研究としては最も有力であると考えられているため, イントネーションに関する項目では Tench (1996) の理論に従う事とする。

まずトーンズであるが, これは前述のように下降調・上昇調の 2 種類のみが取り上げられている。実際の発話において最も多く使われるのは下降調で, 次いで上昇調であるため, 音調の指導としては明快で中学生には理解しやすいと考えられる。竹林 (1996) は「イントネーションは多分に心理的, 情緒的な性格を帯びているため他の音声的な要素以上に世界の言語において広く人類に共通する点が認められる」としている。下降調, 上昇調の持つニュアンスは日本語と共通しているため, これらの習得は比較的難しくないとと思われる。しかし英語独特のイントネーションの機能として, 他の音調の存在 (下降上昇調, 上昇下降調など) は何らかの方法で示唆しておいてもいいのではないだろうか。英語のイントネーションの持つダイナミックなピッチ変化は指導しなければわからない上, 日本語にない目立つ音調であるため恥ずかしさが先に出てその音調を使えなくなる傾向があるからである。イントネーションが文法に関わる機能を持っている事を記述しているのは Columbus で, 発話が完全な疑問文でなくても最後に上昇調を使用すれば疑問文になる事を記述している。その他トーンズを扱っている教科書の多くは付加疑問の際のピッチ変化に注目しているものが多い。

トナリテイに関して, 発話の切れ目に “|” をいれて示しているのが Columbus, New Horizon, One World, Sunshine, Total の 5 種である。ピッチ変化は切れ目の直前で起こり, そこまでがひとつの情報単位と一致するのが普通である。つまり発話の切れ目は文法的にも情報整理の意味を含んでおり, 非常に重要な要素と言える。教科書の記述では 2 つ以上の文章を繋いだときや長い文章を読むときの区切り方として書かれている。New Horizon では物語の朗読などでは台詞の部分と後の部分で音調を変えて読むように指導している。これはトナリテイの働きで, どこまでが台詞であ

るのかを区別する、すなわちどこまでがひとつの情報単位であるのかを示している。さらに Columbus では単語列挙の音調変化を、Sunshine では呼びかけるときと同格のときの音調の違いを、切れ目を入れる事によって区別するよう説明している。イントネーションのもたらすこの意味の違いは指導されなければ理解できない問題なので、今後の普及を期待したい。

トニシティを取り上げているのは Columbus, New Crown, Total である。Columbus, New Crown では発話において話者が伝えたい情報の単語にピッチ変化が現れる事を示している。前者は会話文の一節を曲線表示方法で、後者は強勢が内容語の間で移動し得る事を太字で示している。Total では助動詞 can と can't で置かれる強勢の違いを聞き取る練習を取り入れている。

以上、イントネーションの機能に関する指導をみてきたが、まだまだイントネーションに関しては認知度が低いといえるだろう。単純に平叙文と疑問詞を使用した文章で下降調、疑問文で上昇調を使用するという指導が大半であり、その意味や理由を説明している記述はみられなかった。また、イントネーションは話者の気持ちや立場、知識など様々な要因によって変化するという事も記述されておらず、指導された音調変化が唯一無二の存在であると考えてしまう可能性もありうる。今後のイントネーション研究と、それらを如何に教材に組み込んでいくかの研究が期待される。

3. 音声学習指導書の作成

3.1 指導書作成に関する留意点

この章では実際に中学生に向けた指導書を想定し、口調を彼らに向けた言い方に改めて書き下すこととする。なお、使用する単語と発話文は基本的に先に検討した中学校教科書から引用したものである。ただし、練習に適した長さにするため、あるいは意味をわかりやすくするために若干変更している場合がある。また、例文として用いられている発話文で引用表示

がないものは筆者が考案したものである。引用表示は以下の通りとする。

- A. COLUMBUS (光村図書)
- B. EVERYDAY ENGLISH (中教出版)
- C. NEW CROWN (三省堂)
- D. NEW HORIZON (東京書籍)
- E. One World (教育出版)
- F. Sunshine (開隆堂)
- G. Total (学校図書)

例) One World 1年生の教科書 100 ページからの引用 → (E1 p.100)

Total 3年生の教科書 15 ページからの引用 → (G3 p.15)

以下に、作成上のその他の留意点を挙げる。

- ・使用する発音記号は教科書の方式にのっとってジョーンズ式に基づく簡略表記とする。
- ・発音は教科書の取り扱い頻度に従って、米音を扱うものとする。

3.2 強勢・リズム・イントネーション

3.2.1 強勢

英語を話す時には、単語のあるひとまとまりになる一部分（音節）をほかのところよりも目立たせて発音する必要があります。つまり、ある音節に他よりも強いエネルギーを込めて声を大きくしたり、長めに発音したり、音の高さを変えたりするわけですが、この現象を強勢 (**stress**) と言います。英語では強勢が非常に重要な役割を果たしており、2音節以上の単語では必ずどこかの音節に強勢が置かれ、強勢のない音節は弱く発音されます。しかし日本語では強勢が重要ではないため、日本語話者は英語を話す時でも日本語と同じように平坦に話してしまいがちです。しかし逆に英語のネ

イティブスピーカーにとっては強勢が大切なのですから、これを無視して英語を話すことはできません。強勢のある位置をしっかりと学び、そこを意識的に際立たせる事こそ英語らしい英語を話す第一歩と言えるのです¹⁾。

3.2.2 リズム

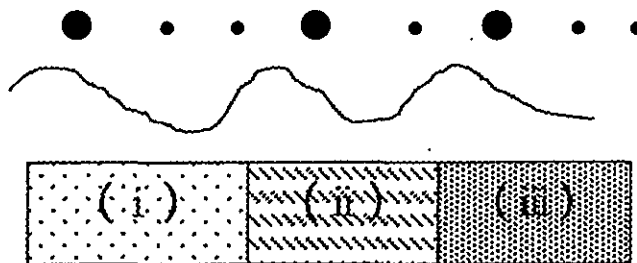
日本語のリズムは特徴として、ひらがな 1 つ分の長さを 1 として数えてすべての音節がほとんど同じ長さで話されます。そのため日本語は平坦なリズムがずっと続くようになっています。それに対して英語は、強勢のある音節から次の強勢のある音節までの長さが同じ長さになりやすいという傾向があります。例を見てください。

例) はじめまして。 / Nice to meet you. (D1 p.19)
 タタタタタタ ター ター タ

日本語は均等なリズムが続くのに対して、英語は強く長いところがあるのがわかると思います。この日本語と英語のリズム性の違いが、実は発話における重要な要因となるのです。このため文法的には正確に話しているはずなのにネイティブスピーカーには理解してもらえなかった、ということが起こるのです。

それでは英語のリズムの特徴を具体的に見てみましょう。

例) **Thank** you for **call** ing, **E** mi ly. (F1 p.25)



① 強弱

発話の際には、強勢を受ける語と受けない語の2種類に分かれます。

- | | | |
|---|----------|--|
| { | 強勢を受ける語 | → 名詞・動詞・形容詞・副詞・疑問詞・数詞など
実際に意味が強い語(内容語) |
| | 強勢を受けない語 | → 助動詞・前置詞・人称代名詞・接続詞・関係詞
など文法的な役割を持つ語(機能語) |

(しかしこれらは原則であり、条件によっては変化する事もあります。)

例では“Thank” “calling” “Emily” の3つの内容語に強勢があり、それ以外の語にはありません。

② グループ性

ある強勢から次の強勢までのあいだにいくつか弱音節がある場合、それらはひとつの大きなまとまりになります。(i) では強勢のある“Thank” から順々に力が弱まり、“Thank you for” が1つのグループをつくっていて、ちょうど波のように発話されます。この場合は“you for” までは“thank” の波の中にあり、“call” からまた別の波が押し寄せてくるようになります。しかし、波が押し寄せるには前兆が必要で、“for” のあたりから次の波の準備が始まる感じになります。

③ 均等な時間配分 (等時性)

例を見ると、(i) では単語が3つ、(ii) では単語が1つですが、時間的な長さはほとんど変わりません。発話では単語や音節の数に関わらず、強勢から強勢までの時間がほぼ均等になる傾向があります。

④ 速さの変化

(i) と (ii) がほぼ同じ時間で話されるという事は、単語も音節も多い(i) は、必然的に(ii) よりも早く話されます。つまり弱音節の数が1つのグループの中に多ければ多いほど早く、少なければ少ないほどゆっくり話す事になり、速さの変化が生じます。

⑤ 弱形

強勢のある音節ははっきり発音されますが、弱音節は③・④で述べたようにすばやく話される事がほとんどです。そのため速く話しやすいように母音をあいまいに発音する傾向が非常に強いのです。このあいまいな母音を弱形といい、ネイティブスピーカーは特に意識的でない限り弱形で発音します。逆に日本人の英語学習者が弱音節まですべてはっきりと発音すると、ネイティブスピーカーにとっては非常に聞きづらい発音になるので注意しましょう。

以上のように、英語のリズムは日本語と大きな違いがあります。もう一度例を見てください。(i) (ii) (iii) と並んでいる四角形の様子は、ちょうど音楽の楽譜のように見えませんか？ 英語のリズムは非常に音楽的だといえるのです。日本語のリズムが時計の秒針のようにカチコチと決まったリズムを刻むのに対して、英語は強勢で区切られた小節のなかで歌を歌っているようなものです。この違いを意識して、恥ずかしがらずにテンポ良く、歌うようにして英語を練習していきましょう。

3.2.3 イントネーション

* イントネーションとは ～日本語と英語の違い～

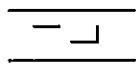
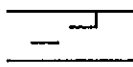
イントネーションとは、声の高さ (pitch) の上がり下がりの事です。日本語にも英語にもピッチ変化は存在しますが、その働きは全く違うものです。

日本語でのピッチ変化は単語のアクセント、発話のイントネーションに関わり、単語の意味を変える働きを持っています。なお、下記において は人が話す時のピッチの幅 (高・低) を表します。

例1) あさ (朝) / あさ (麻)
 /
 /

例1のように朝と麻の違いは、朝の意味の時が「さ」でピッチが下がり、麻の意味の時は「さ」でピッチが上がっています。これによって日本語では単語の意味の違いを認識できます。なお、日本語には単語の意味を変えるピッチ変化（ピッチアクセント）と共に、発話の意味を変えるピッチ変化（イントネーション）も存在します。

例2) あさ（朝） / あさ（麻）

	/	
朝？		麻？

それに対し、英語でのピッチ変化は単語の意味を変化させる事はありません。英語では発話の意味を変える働きがあるのです。

例3) Mary. (メアリー、こっちへ来て)



Mary. (メアリー、どこにいるの？あなたなの？)



「メアリーを呼ぶ」という単語の意味自体は変わりませんが、前者は普通に呼ぶ場合で、特別な意図を含んでいません。それに対し後者はメアリーがいる場所が分からない、またはメアリーであるかどうか分からないなど、特別な意味を含んでいる場合に用いられます。

* イントネーションの働き

イントネーションが持つ働きは大きく次の3つに分けられます。

① 話者の感情や態度を表す働き

喜んだり怒ったりしている時は高いピッチで話し、落ち込んだ時や憂鬱な時には低いピッチで話す。こういう現象は日本語や英語だけでなく、世界中の多くの言語に共通してみられます。また、言葉そのものには現れな

い話し手の意図や気持ちを伝える役割を持っています。

② 文法的機能

ピッチ変化をさせることによって、肯定文や否定文、命令文などの違いを表す事ができます。いくつか例を見てみましょう。

例 1) You hate frogs? (C3 p.70)

“frogs” でピッチを上げると、文の形は肯定文でも内容的には疑問文になります。

例 2) Don't you think this flower is beautiful?

(この花、きれいだね)

この場合は文の形は疑問文でも、内容的には肯定文になっています。

例 3) You must be very careful. (よく注意しなさい。)

このように“must” でピッチ変化をさせる事によって肯定文でも命令の意味を持ちます。

③ ある部分を目立たせる働き

人は何かを伝えようとして話しをします。イントネーションは発話の中で最も伝えたい情報(情報の焦点)を目立たせる役割を持っています。例を見てみましょう。

例) I like English. … 私は英語が好きです。

I like English. … 私は英語が好きです。

I like English. … 私は英語が好きです。

* イントネーションのかたち

次にイントネーションのかたちをみていきましょう。

①ピッチ変化の種類

ピッチの変化がどのようになっているのか、研究者によって様々に分類されています。このピッチ変化の種類のことを音調（トーンズ, tones）と呼びます。ここでは最も重要と思われる4つの音調を挙げておきましょう。

音調の中でもっとも多く見られるのは下降調（●）です。これは「言い終わった、終わった」という感じを持っていて、普通に発話を終える時に使われます。他にも「話者が優位である」という意味合いももち、命令文などで使用されます。それと反対に、上昇調（●）の場合は「まだ言い終わっていない、続きが残っている」という感じ、つまり情報がまだ伝わっていないというニュアンスを持っています。他にも上昇調は「相手に対する尊敬」の意味もあるため、自分が情報を求める疑問文などでよく使用されます²⁾。このふたつの音調は日本語にもあり、意味も共通しているため比較的わかりやすいと思います。しかし英語には下降上昇調（●）と上昇下降調（●）という音調も存在し、これらは日本語に無い音調のため練習しなくては身に付きません。日本語にないダイナミックな動きの音ですが、恥ずかしがらずに練習するようにしましょう。

それでは簡単な例を見てみましょう³⁾。

- a) Yes. ● (いいです) —— 普通の答え
- b) Yes. ● (いいですか?) —— 尋ねている
- c) Yes. ● (ええ、いいんですが、[でも…]) —— 躊躇している
- d) Yes. ● (もちろんですよ、とんでもない) —— とくに相手の言った事を否定するときなど

②ピッチ変化の場所

ピッチ変化の起こる位置はその発話の中で話者が伝えたいと思っているところ、すなわち情報の焦点です。この情報の焦点を決定するイントネーションの働きの事をトニシティ (tonicity) と呼びます。同じ文法で話されていてもピッチ変化の位置が違えば発話の意味が変わります。つまり、イントネーションが発話の意味に影響を与えるという事になります。

例) I like this **picture**. (この絵が好きです。) —— 普通の言い方

I like **this** picture. (この絵が好きです。) —— 二つ以上の絵を比較し、一方を指している

③イントネーションの構造

話者は話をするときに、情報をいくつかの単位に分割していきます。イントネーションが情報の単位を分ける働きの事をトナリティ (tonality) と呼びます。分割された切れ目のところでピッチ変化が起こり、その間にわずかにポーズがあるのが普通ですが、例外もあります。

例 1) a) This is my **son**, | **John**. |

b) This is my **son**, John. |

a)では「こちらが私の息子で、ジョンと言う名前だよ」の意味になり、b)では「ジョン、こちらが私の息子だよ」という意味になります。トナリティの働きで a) は情報の数がふたつだという事が分かり、すなわち「息子」がいて、その名前が「ジョン」であるということを伝えています。b)では情報の焦点は息子であり、ジョンは呼びかけになります。

例 2) a) He's going out, | is he? (彼、行くの、そうなの?)

b) He's going out, is he? |

(彼、行くんだね——皮肉や批判などの気持ちが込められている。

誰かから彼が行くと聞いたり、偶然に分かったという場合)⁴⁾

3.2.4 強勢・リズム・イントネーションの関係

これまで強勢・リズム・イントネーションを各自検討してきましたが、英語の発話はそれぞれを別々に考える事はできません。すべての要因が一緒になってある発話を構成しているのです。ここではお互いの関係を明らかにしていきます⁵⁾。

発話は単語と単語の組み合わせによって成り立っています。単語はそれぞれに強勢を受ける音節が存在し、強勢のある音節とない音節の連続によって発話の中にリズムが作り出されます。しかしリズムの項で説明したように、意味が濃い単語（内容語）には強勢があり、意味が薄い単語（機能語）には強勢がない事がほとんどです。これによって発話の際の強勢が置かれる位置が決まります。そして話者の感情や意図を表すイントネーションがどこかの強勢の位置で生じます。（場合によっては本来強勢がないところでも生じる）

イントネーションは伝えたい情報や感情によって位置や数が変化しますから、少なくとも1つは発話の中にあり、時に3つ、4つと多く含まれる場合もあります。

例 a) I have some **pic**tures of my **fam**ily. (G1 p.31)

● ● ● ● ● ● ● ● ● ●

強勢の位置だけを記すとこのようになります。しかしこれは発話ですからどこかに情報の焦点や話者の意図を表すイントネーションが含まれます。そこでここでの練習では、特に意味が加えられていない状態のイントネーションの位置と形を記していく事にします。

例 b) I have some **pic**tures of my **fam**ily. (G1 p.31)

● ● ● ● ● ● ● ● ● ●

この発話では“family”に情報の焦点が置かれると思われます。そこで、“family”に発話が一度終わる事を意味する下降調をおくことで、この発話

における一般的なイントネーションを記述したといえる事になります。これ以外にも “I” “have” “some” “my” などにピッチ変化が生ずる可能性もあります。ですからここで記されているイントネーションだけではないという事を頭に入れた上で練習してください。

3.3 単語の強勢

3.3.1 2音節の単語

単語はそれぞれ生まれつき強勢が置かれる音節の位置が決まっています。強勢の位置を間違えるとネイティブスピーカーにとっては非常に耳慣れない発音に聞えてしまい、何の言葉をお話しているのか分からない時もあります。以下の練習で ● は強勢がある音節で、● は強勢のない音節です。意識的に強さを変えてみましょう。

1. very	2. seven	3. teacher
● ●	● ●	● ●
4. begin	5. collect	6. thirteen
● ●	● ●	● ●

3.3.2 3音節以上の単語

英語は単語の中にもリズム性を持っています。強勢がある音節の隣に弱い音節がいくつか続いた場合にはどちらかの弱い音節が一方よりも強くなることがあります。この場合、一番強い音節に第一強勢が、二番目に強い音節に第二強勢があるといえます。例を見てみましょう。

例) Ja pa nese
○ ● ●

この場合、○の ‘Ja’ に第二強勢があるといえます。しかし第二強勢は単語を単独に発音した場合にはっきりと現れますが、発話の中では自然に弱

まるため、実際に発話する時には母音をはっきり発音すれば特に強さを意識する必要はありません。⁶⁾

- | | | |
|------------------------------|------------------------------|-----------------------------|
| 1. difficult
● ● ● | 2. festival
● ● ● | 3. uniform
● ● ● |
| 4. volunteer
○ ● ● | 5. afternoon
○ ● ● | 6. Japanese
○ ● ● |

3.3.3 単語が2つ並ぶ場合

単語が2つ並ぶとき、強勢の位置が決まっているものや位置によって意味が変わってしまう組み合わせもあります。

i) 前の単語に強勢がある場合

基本的に名詞と名詞が並んでいるときには前のほうの単語に強勢があります。

- | | |
|--|--|
| 1. music club (A1 p.30)
● ● ● | 2. English teacher (A1 p.22)
● ● ● ● |
| 3. pencil case (A1 p.57)
● ● ● | 4. soccer game (A1 p.80)
● ● ● |

ii) 両方に強勢がある場合

今度は両方に強勢がある場合です。基本的には形容詞が名詞を修飾するとき起こります。

- | | |
|--|--|
| 1. public bath (D1 p.22)
● ● ● ● | 2. twentieth century (D1 p.61)
● ● ● ● |
| 3. every student (D1 p.67)
● ● ● ● | 4. social studies (D1 p.67)
● ● ● ● |

iii) 強勢の位置によって意味が変わる場合

2つの単語が並んで、単語本来の意味から変化して特別な意味をもつ言

葉の場合には前のほうに強勢が置かれて、ひとまとまりの単語のように発音します。逆に、文字どおりの意味を持たせるためには両方に強勢を置きましょう⁷⁾

1. a) **hotdog** (ホットドッグ) b) **hot dog** (熱い犬) (A1 p.42)
2. a) **ice cream** (アイスクリーム) b) **ice cream** (冷たいクリーム) (A1 p.42)
3. a) **darkroom** (暗室) b) **dark room** (暗い部屋)
4. a) **green house** (温室) b) **green house** (緑の家)
5. a) **hot plate** (ホットプレート) b) **hot plate** (熱い皿)

3.3.4 カタカナ英語と英単語の強勢位置の違い

日本ではカタカナで表現され日常使われている英語がありますが、それらは発音はもとより強勢の位置が移動してしまったものが多く、日本語化した英語、すなわち英語らしい日本語といってもいいほどです。また、日本語と英語の音節構造の違いにより、日本語と英語で感じられる音節の数が違うものがたくさんあります。例えばベースボールという言葉は、日本語では「ベ・エ・ス・ボ・オ・ル」と数えて、6つの単位から成り立っていると感じるはずですが。しかし英語では base-ball の2つの単位、すなわち2つの音節から成り立っています。この違いが日本人の英語を日本人にしか通じない英語にできてしまっているのです⁸⁾。強勢の位置の違いをしっかりと覚えましょう。

- | | | | |
|----------------|--------------|-----------|-----------------|
| 1. アメリカ | 2. イタリア | 3. テレビ | 4. コンピューター |
| America | Italy | TV | computer |
| [əmə'ɪkə] | [i'tæli] | [ti:vi:] | [kəm'pjú:tə(r)] |

3.4 発話のリズムとイントネーション

3.4.1 強勢が1つの場合

発話の中に強勢が1つの時は、そこが情報の焦点になるのでピッチ変化が生じます。逆にいうと、「伝えたい情報はその発話の中で1つだけだ」という事になります。それ以外の弱強勢の音節はひとかたまりで早めに発話しましょう。単語が1つだけの場合でもその単語でピッチ変化は生じます。

1. **Coffee?** (-Yes, please.) (E1 p.13)



2. It's **beautiful!** (B1 p.32)



3. She's from **Canada.** (D1 p.34)



3.4.2 強勢が2つの場合

強勢が2つの場合は、そのどちらか一方かまたは両方でピッチ変化が起こる可能性があります。基本的には後の強勢のほうでピッチ変化が起こりますが、あくまで伝えたい情報が重要なので、話の前後の関係を考慮してください。

普通はピッチ変化は後の方の強勢で起こる事が多いのですが、前の方に伝えたい情報がある場合には前のほうで起こります。

例) Here are **three dogs.** (三匹の犬がいるよ)



Here are **three dogs.** (三匹の犬がいるよ)



前の方でピッチ変化が起こった場合には、その後続く強勢が少し弱くなって、第二強勢的な強さになります⁹⁾。

1. I **use** it a lot. (B1 p.60)



2. Did you enjoy your vacation? (G2 p.13)



3. **Beef** or chicken? (E1 p.13)



3.4.3 強勢が3つの場合

1. **We** can **keep** in touch. (A2 p.18)



2. **People** on the **street** often **stare** at me. (A3 p.4)



3. I visited him this **spring** with my **family**. (D2 p.13)



3.5 周期的に現れる強いところ

日本語と英語のリズムの違いについては前に一度触れましたが、今度はもう少し詳しく英語のリズムの姿をみてみましょう。日本語がすべての音節にほぼ均等な強さと時間がかかるのに対して、英語は強勢のある音節から次の強勢のある音節までの時間がほぼ同じになります。つまり、強勢が置かれる音節が周期的に現れることが多くなるのです。次の発音を練習して、周期的に現れる強勢の位置を確認しましょう。

1. 1. The **eggs**.



2. The **eggs** were **bigger**.



3. The **eggs** were **bigger** than **hen's** eggs.

(B2 p.61)



2. 1. **Choose.**



2. **Choose** the food.



3. **Choose** the food you want.



4. **Choose** the food you want to eat.

(C3 p.40)



3.6 音調のはたらき

発話においては、イントネーションが話し手の気持ちを表します。場面は話し手によって音調は様々に変化します。いろいろなパターンをみてみましょう。

3.6.1 学校にて

Kazuo: Mr. Davis, I have a bed. Do you have a bed, too?

Mr. Davis: No, I don't. I use futon.

Kazuo: **Really?** (G1 p.23)

一雄 (kazuo) が Davis 先生に質問しています。この最後の“Really?”のイントネーションは一雄の気持ちによって変わります。

・「そうですか (軽い受け答え)」 ●

- ・ 「ほんとうですか？ (意外だなあ)」 ●
- ・ 「そうですか？ でも… (そんなはずはないのに)」 ●
- ・ 「そうなんですか！！ (非常に感心して)」 ●

3.6.2 朝のふとんの中で

Mrs. Baker: Hurry up Ted! You're late.

Ted: I'm coming. (A1 p.35)

Tedがお母さんに起こされています。しっかりと目が醒めていれば“I'm coming” ● となって、「今行くよ」と元気に言えるわけですが、もしまだ眠くてふとんの中で「うーん、今から行くよ…でも、もうちょっと眠りたいなあ」といっているような状態であれば ● の音調になることもあります。

3.7 トニシティのはたらき

イントネーションは話者が伝えたいと思っている情報をもっている単語で起こります。また、特に何も意識的に伝えようとする情報がない場合には、発話の最後の強勢のおかれる位置で生じます。しかし会話の中ですでに知っている情報はもう強調されることはなく、代わりに新しい情報が焦点となるので、そちらのほうにピッチ変化が移動します¹⁰⁾。

1. She's an **English** teacher. (彼女は英語の先生だよ。) (A1 p.22)

● ● ● ● ●

発話の中でこのような答えをいう場合は、ほとんどが“Who's she?”という質問に答える時で、情報の焦点は彼女が「英語」の先生であるということです。

She's an English teacher. (彼女が英語の先生だよ。)

● ● ● ● ● ●

しかし、もしも“Who's an English teacher?”「誰が英語の先生のなの？」という質問に答える場合であれば、情報の焦点は「彼女」が英語の先生だということになります。このとき、「英語の先生」という情報は話者がすでに知っている（話に出ている）情報なので、そこではピッチ変化は起こりません。

2. (Where's he now?)

He is in the **kitchen** now. (C1 p.69)

● ● ● ● ● ●

(Who is in the kitchen now?)

He is in the kitchen now.

● ● ● ● ● ●

(When was he in the kitchen?)

He is in the kitchen **now**.

● ● ● ● ● ●

質問の内容によって情報の焦点が変化します。それぞれの場合を練習してください。

3. I'll hold this **cello** in my arms. | Then **you** hold that violin.

● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●

(B2 p.85)

通常代名詞に強勢は置かれませんが、しかしふたつの発話文を比べた時に内容的に対比するものがあれば、そこに強勢が置かれたりピッチ変化が起こったりします。この場合、「私がチェロをもつから、あなたがバイオリンを持って。」というように、「私」と「あなた」、また「チェロ」と「バイオリン」を対比させています。それぞれを強調させることによって発話の中で情報を整理し、何を伝えたいのかをはっきりさせることができます。

3.8 トナリティのはたらき

1. a) My brother who lives in New York | ...

b) My brother | who lives in New York | ...¹¹⁾

トナリティとは、イントネーションが情報の整理をする役割だと前に紹介しました。では、上の2つの発話文ではどのように違うのでしょうか。a) では「私の兄が、ニューヨークに住んでいる兄のことだけど…」となつて、他にも兄弟がいる中で、ニューヨークに住んでいる兄の話をしている、という意味を含んでいます。しかし b) では「ニューヨークにすんでいる私の兄が…」となり、兄はニューヨークに住んでいる1人だけになります。

2. a) He came to hear about it. |

b) He came | to hear about it. |¹²⁾

この2つの発話でもトナリティによって意味が異なっています。a) のほうは“hear”が情報の焦点となり、「彼はたまたまそのことを聞いた。」という、「偶然聞く」という要素が入ってきます。それに対して b) は、「彼はやってきた。それを聞くために。」という意味になり、「来る」「聞くため」のそれぞれの動作と目的が情報の焦点ということになります。そのため、彼が意識的に聞きに来た、という要素を含みます。このような微妙な違いが、トナリティによってもたらされるのです。

4. 結論

本稿では、最近の英語教育の中で注目を浴びているオーラルコミュニケーションの一端をになう立場として、英語初習者向けのリズム・イントネーションの指導書を作成した。そのためにはまず現在の学校教育における指導の現状を検証することが必要であった。中学校で使用されている教科書を検討した結果、まだまだリズム・イントネーションに関する指導は積極

的に取り入れられているとはいえない状況であることが分かった。作成指導書でイントネーションに関しては Tench (1996) の理論を採用したため耳慣れない用語があるが、筆者はこれらが最も有効であり、これまでのイントネーションの理論では説明しきれなかった機能を上手く説明できる方法であると考えた。またその理論を取り入れた上で、強勢・リズム・イントネーションの関係を別々には考えられないとし、個別の練習を避けて総合的な練習方法を採用した。

この作成指導書の有効性に関しては未検証のため、今後の研究課題としていきたい。本稿の研究が今後の音声指導への何らかの貢献となれば幸いである。

注

- 1) 多くの教科書では強勢という言葉の代わりにアクセント (accent) という表現をしているが、本稿では用いない事とする。元々は強勢という言葉が存在し、アクセントは Gimson (1975) らによって後に提唱された言葉である。アクセントと強勢は似て非なるものであり、その違いはあまり広く認知されていないと思われる。基本的には双方ともある一部分を強調するという現象であるが、アクセントが音調 (pitch)、音の大きさ (loudness)、音の長さ (duration or length)、音色 (quality or timbre) の 4 つの属性の現象によって際立っているとされているのに対して、強勢は「空気を押し出す強さ」という側面しか持っていない。いわば、アクセントの規定している要素の一部に過ぎないといえるのである。しかしその後の研究、特にイントネーション研究が進んでいくと、英語におけるピッチ変化が意味に関わるという非常に大切な要素を含んでいる事が明らかになってきた。(本稿は Tench (1996) のイントネーション理論に基づいて考察している。) そのためイントネーションの理論とアクセントの定義がぶつかり合う事になり、理論性を欠くと筆者は考える。そのため本稿ではアクセントという言葉を使わず、強勢とイントネーションとをもって英語の発話を説明する。
- 2) Tench (1996) は下降調の持つニュアンスをドミナンス (dominance) の音調、上昇調の持つニュアンスをデファランス (deference) の音調であるという表現をしている。
- 3) 深澤 (2000: 51) より引用。
- 4) 深澤 (2000: 52) より引用。

- 5) 従来は強勢・リズム・イントネーションの関係が整理されておらず、それぞれ単独での練習方法が取られてきた。しかし本稿ではこれら 3 つの要素の関係が深いものとして考え、個別での練習は避け、すべて一緒になった上での練習を作成した。単独で練習する事でそれぞれの関係がわかりにくくなるというデメリットを考慮した上での結論である。
- 6) 理論、表記法は Gimson (1975) に基づく。
- 7) 3. ~5. は深澤 (2000: 26) より引用。
- 8) 日本語のリズムは音節拍リズムに属する。音節拍リズムにおいてはすべての音節が強弱の有無に関わらず等間隔に生じ、どこか 1 つの音が際立って強く発音されたり長く発音される事はない。
- 9) ひとつの単語だけで発音されたときと強勢の位置が変わる単語もある。これは強勢が語尾にある単語と語頭にある単語が連続した場合に起こる現象で、前の単語の強勢が第二強勢に移行するというものである。英語のリズムは強+強の形を嫌い、強勢の移動が起こる。
- 10) 既に現れた情報のことを既知情報、新たな情報のことを新情報という。
- 11) Tench (1996: 9) より引用。原文は Nairobi を使用しているが、中学生に認知度が低いと考えると汎用性の高い New York を採用した。
- 12) Tench (1996: 45) より引用。

参考文献

- Abercrombie, D. (1967). *Elements of General Phonetics*. Edinburgh: EUP.
- Crystal, D. (1985). *Linguistics*. 2nd edn. : Penguin.
- Gimson, A.C. (1975). *A Practical Course of English Pronunciation*. London: Edward Arnold.
- Kreidler, C.W (1989). *The Pronunciation of English: a course book in Phonology*. Oxford: Blackwell.
- Ladefoged, P. (2001). *A Course in Phonetics*. 4th edn. Los Angeles: Harcourt.
- Roach, P. (1991). *English Phonetics and Phonology*. 2nd edn. Cambridge: CUP.
- Tench, P. (1996). *The Intonation Systems of English*. London: Cassel.
- 竹林滋. (1982). 『英語音声学入門』大修館.
- _____. (1996). 『英語音声学』大修館.
- 竹林滋, 渡邊末耶子, 清水あつ子, 斎藤弘子 共著. (1991) 『初等英語音声学』大修館.
- 東後勝明. (1978). 『英会話のリズムとイントネーション』金星堂.

- _____ . (1985). 『英語ひとすじの道』 日本放送出版協会.
 深澤俊昭. (1992). 「教育音声学 - テキストの編纂」 『人文研究 No. 113』
 神奈川大学人文学会.
 _____ . (2000). 『英語の発音パーフェクト学習事典』 アルク.
 ミシガン大学英語研究所編. (1958). 『英語の発音』 (黒田巍訳注). 大修館.
 渡辺和幸. (1994). 『英語のリズム・イントネーションの指導』 大修館.

検証に使用した教科書

- 浅野博 他. (2001). 『New Horizon English course 1』 東京書籍.
 _____ . 『New Horizon English course 2』 東京書籍.
 _____ . 『New Horizon English course 3』 東京書籍.
 上田明子 他. (2001). 『Everyday English 1』 中教出版.
 _____ . 『Everyday English 2』 中教出版.
 _____ . 『Everyday English 3』 中教出版.
 佐々木輝雄 他. (2001). 『One World 1』 教育出版.
 _____ . 『One World 2』 教育出版.
 _____ . 『One World 3』 教育出版.
 島岡丘 他. (2000). 『Sunshine English course 1』 開隆堂.
 _____ . 『Sunshine English course 2』 開隆堂.
 _____ . 『Sunshine English course 3』 開隆堂.
 東後勝明 他. (2001). 『Columbus English Course 1』 光村出版.
 _____ . 『Columbus English Course 2』 光村出版.
 _____ . 『Columbus English Course 3』 光村出版.
 堀口俊一 他. (2001). 『Total English 1』 学校図書.
 _____ . 『Total English 2』 学校図書.
 _____ . 『Total English 3』 学校図書.
 森住衛 他. (2001). 『New Crown English Seires new edition 1』 三省堂.
 _____ . 『New Crown English Seires new edition 2』 三省堂.
 _____ . 『New Crown English Seires new edition 3』 三省堂.